

川越中学校初代校長 増野悦興の謎 (四)

滝澤 民夫

雷軒増野悦興は一八六五(慶応元)年九月二〇日、石見国(島根県)津和野で馬廻の藩士増野貞吉の長男として生まれた。貞吉は二五〇石の波多野家から増野文蔵家に養子に入った。母親の名は判っておらず、増野家の娘であったのか、嫁であったのか出自も不明である。増野悦興の前半生には謎が多い。両親と生育時の様子を知りたくて、石見空港からバスと列車を乗り継いで閑静なたたずまいを見せる秋の津和野を訪れた。JR山口線の津和野駅にはSLが停まり、観光客で賑わっていた。

ホームの相向かいの山裾に増野家の菩提寺光明寺がある。浄土宗の光明寺は一七世紀半ばに津和野藩二代藩主亀井茲政が徳川家康の孫であった母親のために開山し、大内義隆の姉の菩提寺であった信盛寺と幕末に合併した寺である。

墓地の一面に増野家の墓所があるが、貞吉が東京に出て太政官出仕となり、増野悦興もキリスト教徒となったため、光明寺との縁が切れ、墓を守る遺族はいない。過去帳には幼少時に他界したという増野の母親の記録はなかった。



増野家の墓所 (津和野町の光明寺)

野興保・興以・興信の名があった。文蔵がどの人物かは不明である。

宗門調によると幕末の津和野藩は、武家五二九六八(八%),町人二〇四〇人(三%),村民六一四五人(八九%)の計六八七八七人で構成されていた。五〇石以上の馬廻は一〇六人で、この頃には一五歳以上になると藩校養老館への三年間の入塾、修業が義務づけられていた。城下の宿場町には増野文蔵(先代礼蔵)と増野貞吉家(先代文蔵)があり、礼蔵は中小姓養老館儒学教授であった。文蔵と文蔵の関係も不明である。また、城下の後田新田の波多野達枝は貞吉の兄で、養老館助教より伍長となっている。『新井宣哉著「津和野藩事蹟談」』。波多野家の家系図によると、波多野・増野両家は代々の縁戚で、増野悦興は藩校の儒者の系流の家に生を受けている。

養老館に学んだ貞吉のちに山口明倫館で大村益次郎らに学び、征夷総督に属して軍事参謀となった(松島弘著『藩校養老館』)。征夷総督は戊辰戦争に際して、一八六八(慶応四年)年に設置された鎮撫総督のことで、貞吉はその配下の津和野藩士として江戸に入った。この年七月に江戸が東京となり、九月には明治改元がおこなわれた。同年九月・二月の太政官行政局の二名の権弁事試験のなかに増野文蔵(貞吉)の名がある(『太政官沿革志(三)』)。また一二月には「官掌木挽丁 ツワノ 増野文蔵」翌六九(明治二年)二月には「書記 東京在勤 増野文蔵」、五月には「録事 在京 増野貞吉」、八月には「権少史 無位 源朝臣貞吉 増野(二)職員録」とある。行政局では弁事・権弁事に次ぐ一番目の

位置にいた。ところが、薩長の高官とそりが合わず同年末に貞吉は新政府を辞めてしまった。その後は実業家を目指し、新潟県での石油採掘事業をはじめたが、士族の商法に終わった。

森鷗外記念館の郷土館所蔵の波多野家文書中に、一八七五年四月から八月にかけての、増野貞吉名の兄波多野達枝宛の燃水社分株(一株五〇円)出金預かり証が三枚残されている。当時、新潟県新津で燃火(水)社が設立され、のちに日本油坑会社に売却されたという記録はあるが、増野貞吉の名はない(門馬延陵著『北越石油業発達史』)。郷里の兄に無心した一五〇円は霧散したと思われる。巡査の初任給が四円、日本酒一升四銭の時代であった。

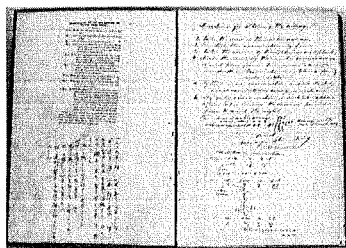
なお、波多野達枝の長男培根はのちに、いとこの増野悦興に誘われて同志社に学び、同志社中部部教頭・校長を経て、晩年は福岡西南学院の教授を勤めた。

養母と妻子を置いての出京後、貞吉は町方の娘高橋だいと再婚して家庭を持ち、五子をもうけた。貞吉の再婚は妻の死後であったかもしれない。長男の増野悦興は津和野で祖母に養育される。増野自身は両親については何も言及していない。一九一一(明治四四年)年一〇月に四七歳で他界した増野は雑司ヶ谷霊園に葬られ、三年後の一四(大正二年)四月に七三歳で没した貞吉の墓は巢鴨の染井霊園にある。

西周や父親貞吉、森鷗外が学んだ藩校養老館は一八七二年に廃校となっていた。増野悦興は七七年に津和野小学校を卒業後、同年周防山口で創業した黒城岡村圭三の黒城私塾に修学した。当時の生徒

は男九四名、女五名で、高い教育理念のもとで修身・漢学が教授された。岡村黒城はかつて明倫館でも教え、のちに山口師範学校で書道を教授した(『山口市史』)。増野の山口修学には貞吉の薦めもあったと推測できる。二年間の修学後、七九年には東京に出て貞吉の元から明治学院の前身の東京一致神学校(築地の英和学院)に通った。この頃キリスト教に回心したとされている。入学願ひ等の明治学院の関係資料は一九四五年三月の東京大空襲で焼失しており、詳細は確認できなかった。

一八八〇年には一五歳で同志社へ編入学し、翌八一年九月、一七歳直前に同志社英学校に入学したと思われる。八三年一二月、三年生のときに徴兵令がらみで一旦退校するが、翌八四年に四年生として再入学した。翌々八六年三月、卒業を目前に学友八名とともに米国人教師の指導方針に抗議して退学してしまう。二一歳であった。この間の在学中の増野の成績記録の一部(二科目)が同志社大学に残されている。



同志社成績簿 (同志社大学蔵)

それによると、二年時の八三年には文法、数学A、数学、四年時の八五年には分析幾何、修辞学、動物学、物理学、生理学、文明史、化学、植物学を履修している。退

校がからんでか二年時の数学の成績は途中までで、意外にも漢学はかんばしくなかった。成績は優秀で一〇科目の平均は八.六である。

こうして新島讓の元で学んだ増野悦興は、やがて一八九〇年八月からの三カ年間の北米留学で、ピューリタン精神を「自由・自治・自活の民」の精神として実感する。帰国後は新神学を主張して当時の同志社キリスト教界に容れられず、靈南坂教会・安中教会牧師を経て一八九六(明治一九)年に岐阜県立中学校嘱託教員として赴任した。ほどなくバンゴア神学校の先輩の蔵原惟郭が校長として着任する。蔵原は米国・英国留学後、私立熊本洋学校長・同女学校長となるが、同校長を辞任後、嘉納治五郎・文部次官牧野伸顕を通じて埼玉県知事千家尊福に校長職の斡旋を依頼しており、同年四月一八日に文相西園寺公望・次官牧野の推薦で岐阜・大垣・飛騨・御嶽の四中学校長として着任した。任命者は首相伊藤博文であった。増野の赴任は一月二六日で、蔵原就任以前であり、その経緯は謎である。

県立岐阜中学校では増野は筆頭格で、九七年四月には語学部長となり、三年生の訳解九時間、四年生の倫理二時間・訳解六時間、五年生の歴史三時間・訳解三時間を担当している。校長の蔵原は五年生に倫理一時間であった。同年六月には蔵原は知事と対立して去任した。任し、九月には増野も石川県尋常中学校教諭心得として赴任する。その後の埼玉県第三中学校長就任までの事情もまだ判明していない。

増野悦興の同志社時代までの足跡の詳細は、郷土部報『初雁』二六号で報告したい。(高一八回)